

審査の結果の要旨

氏名 吉川佳予子

本研究はネパール、カトマンズに在住する1年以上結婚している女性とその配偶者717組を対象に夫から妻に対する暴力に関して実施した横断研究である。収集データを用いて夫婦間のデータの相違、及び暴力に対する態度と暴力の申告との関連を分析し、下記の結果を得ている。

1. 本研究の質問票は、WHOのMulti-country study for domestic violence against womenを基盤にして作成した。夫から妻への暴力は、身体的、性的および心理的暴力に分けて質問した。夫と妻それぞれの回答を比較したところ、すべての暴力タイプにおいて夫自身の妻への暴力行為の報告の方が、妻自身の夫からの暴力の被害報告よりも多いという結果が得られた（身体的暴力 11.29% vs.13.52%;性的暴力 3.77% vs.5.86%;心理的暴力 7.39% vs.7.81%）。
2. 夫から妻への暴力に対する報告に関して、夫と妻それぞれのデータをカッパ係数を用いて解析したところ、すべての暴力タイプにおいてカッパ係数が有意に低いことが示された。これによって夫婦間のデータの一致度は低いという結果が示されたことになる。
3. 夫と妻それぞれの年齢、教育、結婚への満足度、夫婦間の年齢・教育・収入差および世帯収入と夫婦間のデータの相違との関連を多重ロジスティック回帰分析によって解析したところ、夫と妻それぞれの結婚への満足度が、一貫してすべての暴力タイプの夫婦間データの相違に有意に関連していることが示された。結婚への満足度がより強く、結婚への後悔の頻度が少ない夫婦の方が、夫婦間のデータがより一致している傾向が示された。
4. 暴力に対する態度と暴力の申告についての関連はマルチレベルモデリングを用いて解析した。交互作用として夫と妻を項目として追加した。その結果、暴力に対する態度は身体的 ($\beta=0.32, p=0.03$)、心理的 ($\beta=0.63, p<0.001$) 及びいずれかの暴力 ($\beta=0.42, p<0.001$) の申告と有意に関連があることが示された。また、この関連は夫においてより強く表れていた。暴力に対し肯定的な態度を持つ夫は、妻への暴力行為をより多く申告する傾向があることが示された。
5. 配偶者の暴力に対する態度と個人の暴力の申告との関連を行為者-パートナー 相互依存性モデルを用いて解析した。その結果、暴力に対する配偶者の肯定的な態度は個人の身体的暴力 ($\beta=0.40, p=0.003$) といずれかの暴力 ($\beta=0.29, p=0.015$) の申告と有意な関連があった。この関連は夫と妻に等しくみられることが交互作用の解析より示唆された。

以上、本研究はカトマンズに在住する一年以上結婚している夫婦において、夫から妻への暴力に関する夫婦間のデータの一致度は低く、夫婦それぞれの暴力に対する態度は夫婦の暴力の申告と関連があることを示した。本研究は、まだ歴史の浅い夫婦間暴力研究においてデータ収集法とデータ分析・解釈のあり方について重要な貢献をなすものであり、学位の授与に値するものと考えられる。